



第21回 富士市畜産共進会で  
市長賞を受賞

もちづきかつみ  
**望月克巳さん**  
久沢北(40歳)

趣味は「養豚」というほどの働き物で、生き物が人一倍好き。奥さんの洋子さんは、「捨て犬などを拾つてきて困るんですよ」と笑う。家族はご両親と一人の子供の六人家族。長男の慎一君は、富士宮農高畜産科の一年生で、すでに後継ぎを宣言。共進会の前日は、親子で入念に豚の手入れをしました。「将来も安心ですね」と尋ねると、思わず自らがほころびました。



乳牛・肉牛・種豚の優秀さを競うことで、畜産経営の発展を期する畜産共進会。

望月さんは種豚の部で、見事市長賞を受賞しました。

二十歳のとき、自分の考えで養豚を始め、現在は二十頭の親豚を飼っています。

朝六時に起きて、えさをやり、午前中の掃除、夕方のえさをやる作業には盆も正用もありません。

それだけに、こうした共進会での賞は「本当にうれしい」とのこと。過去に優等賞を四回受賞しています。(その内二回は市長賞)



## 我がまちを語る



鈴木富男さん

中里町3(83歳)

私は須津に生まれ、須津に育つて八十年。昔の須津はのどかなものでした。人々は水稻や陸稻、お茶、烟作などで生計を立て、副業に、どこのうちでも竹行李をつく

## 親しみのわく根方言葉

つたものです。  
地区の人は純朴で、「ずら」「にやあ」の根方言葉をしゃべり、親しみがありました。そんな人柄は、今も伝わっています。

現在の町の様子を見ると、家も人もふえ、生活は便利になつて大変発展したと思います。

しかし、これは昔から住む人だけの感じかもしれません。根方の持つ「いまだ開けていない」というようなイメージは、ぬぐい去る必要があります。

それには、赤渕川以東には少ない文化的な公共施設の建設や、大棚の滝の整備などを進めてほしいと思います。

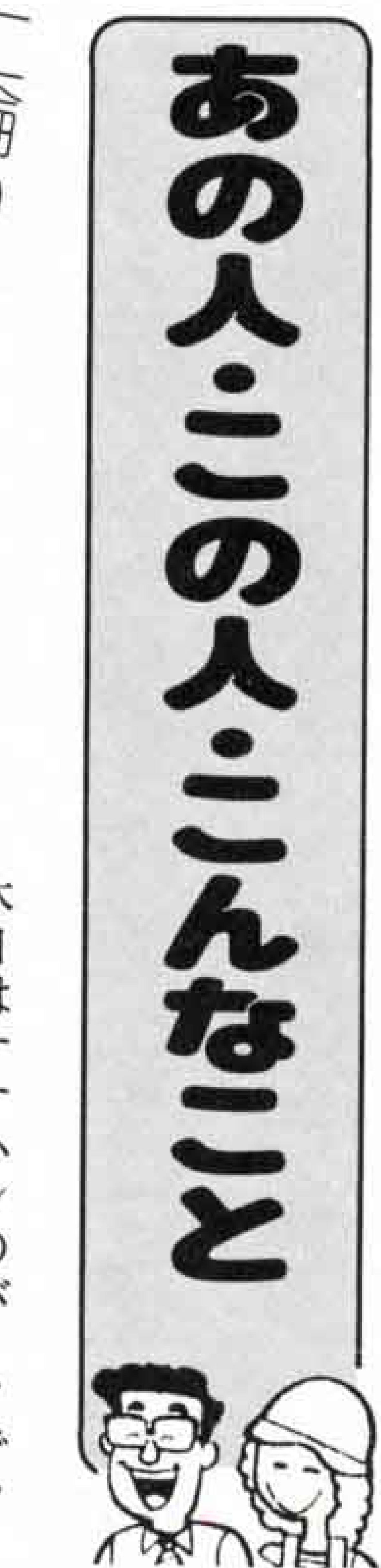


墨絵は心の表現

村松和さん(中里町)

墨の濃淡で幽玄の世界を表現する墨絵。二十四歳のとき疎開先の禅寺で墨絵と出会った村松さんは、以後、仕事のかたわら練習を続けてきました。昭和五十二年から公民館の成人学校の講師となり、教えた人は延千人を超えています。

「墨絵は心の表現。どれだけ精神集中できたかが作品にあらわれます」と悟りの境地。



秋の味覚ナシ。中里、神谷、増川、川尻の農家二十四軒が集団栽培をしている「富士三水園」に、九月中旬までおいしいナシがたわわになりました。ありのみ会は人工授粉や剪定など農作業を裏で支える奥さんが四年前に結成しました。会長の野中さんは「ここの中シは味が濃くて水々しいのが特徴」と元気よくセールス。